

江刺金札米

(減農薬・減化学肥料)

令和7年産

1等米比率100%、整粒歩合80%以上、タンパク質含有率6.0%以下 I 種子及び対象品種 江刺金札米の土づくりについて 生育目標指標 (目標収量540kg/10a) 最高分げつ m茎数 中干し開始 登熟步合 (本) (粒) 栽植 土づくりと基肥が 施用量 80~100kg/10a 金札有機入り春専用レギュラー 稲わら + 密度 同時施用できる省力的な 400-320~ 480~ 施用量 100~120kg/10a 金札有機入り春専用一発 (株/坪) 土づくり 350 530 440 1.種 子 1株あたり 全量種子更新 稲わら鋤き込みと 70 25 17 21 金札春一番(春施用)・秋一番(秋施用) 施用量 50kg/10a 85~ 61~ あわせた基本的な 稲わら + 2.品 種 金札フジュクオー(秋施用) 施用量 45kg/10a 90% 71 60 18 28 23 土づくり(秋施用を推奨) ひとめぼれ 55 20 29 25 堆肥施用とあわせた 施用量 40kg/10a 堆 肥 + 金札エネルギー 土づくり 50 21 32 26 8 月 10 月 4 月 月 6 月 作業内容等 上旬 中旬下旬 上旬 中旬 下旬 上旬中旬 下旬 上旬中旬 下旬 上旬中旬 下旬|上旬 中旬 下旬 上旬中旬下旬 生育ステージ 播種・育苗 有効分げつ期 無効分げつ期 幼穂形成期 減数分裂期 田植え 出穂期 登熟期 成熟期 高温の場合は、地温を下げる水管理 水深6~10cm 15cm前後 (徐々に深水) 水 管 理 畦畔の整備・補修(環境保全) 溝切り (夜間かんがいや水の入替え頻度を増やす等) (低温から稲を守る) 3cm前後(生育促進) (低温から幼穂を守る) 開花期(浅水) 間断灌水(徐々に落水期間を長く) カメムシふ化盛期前後(5月中下旬) イネ科雑草が出穂する前にこまめに実施 水稲の出穂10~15日前 本田にカメムシを追い込む可能性があるため控える 地域一斉草刈り 播種 秋 耕 作 落 水 中干し・溝切り 田植え 追肥 収穫 代かき (出穂30~ 基肥散布・耕起 40日後) 土づくり資材散布 業 。目標穂数の8割を確 ◦カメムシ防除は畦畔 ∘ 積算気温900~ 内 稲わらの分解促進 高温障害回避のためは 保したら(目安は田 や周辺の除草を徹底 1,050℃を目安に のためできるだけ 。作土深は15cm確保 植え後30日)、期間 籾の黄化割合で判 早期移植は控える し、穂揃いから1週 容 早い時期に耕起 は14日間程度実施 間後までに実施 断し、適期収穫 農薬防 [箱施用剤] [種子消毒] [カメムシ防除剤] [中期除草剤] [いもち病予防剤] 除体 消毒済み種子を配布 ※1回防除 [初中期一発除草剤]

肥 1.施 肥

培

管

理

	肥料名	施用量 (窒素成分量) kg/10a
	新・金札ひとめぼれ	30 (3.0)
基	金札有機入り ひとめぼれ	40~60 (4.0~6.0*)
	金札有機入り 春専用レギュラー	80~100 (4.8~6.0*)
肥	有機フレーバー ペースト734	40~60 (2.8~4.2*)
	コープペースト 222P	25 (3.0)
追肥	金札追肥	栄養診断による追肥 9~10 (0.9~1.0)
基肥	金札有機入り ひとめぼれ一発	50~70 (5.0~7.0%)
一発型	金札有機入り 春専用一発	100~120 (6.0~7.2%)

- ※窒素成分のうち50%の有機態窒素を含む。
- ●堆厩肥を1.5t / 10a以上投入する 場合、 堆肥1t当たり基肥窒素を 1kg程度減肥すること。
- ●食味の低下を防ぐため、 減数分裂 期後の追肥はしない。

1.耕種的防除

○畦畔整備・補修による農薬等の流出防止。

雑草

○代かき~田植えまでの日数は4日以内とする。

防

除

2.薬剤防除

薬剤名

1キロ粒剤

乳剤

各剤とも使用上の注意を守り、適期散布しましょう。

ウルティモス 移植時~ノビエ3.5葉期

散布時期

散布方法

初中期一発剤	フロ ウリ ウリ	レティモ Z コアブル レティモ Z ャンボ レティモ Z iOFG	移植後5日〜ノビエ3葉期	湛水散布 ※5~6cm の水深とし 1週間は止 水管理
txi N	薬	剤 名	散 布 時 期 対象雑草	散布方法
1 🔿	_	バサグラン 粒剤	移植後15~55日 ホタルイクログワイ	落水散布 ※散布後最
1剤を選択して (右記3種類の中 中後期剤 ※選		バサグラン 液剤	移植後15~55日 オモダカ	低3日間は 止水管理
選択-	剤	トドメMF 1キロ粒剤	移植後14日~ ノビエ5葉期 ノビエ	湛水散布 ※3~5cm
剤を選択して散布) 行記3種類の中から		トドメMF 乳剤	移植後14日~ ノビエ7葉期	湛水または 落水散布
一一の	制	ロイヤント	移植後20日~ イボクサ、クサネム	落水散布

ノビエ5葉期

1.耕種的防除

- ○カビ・細菌病
- 出芽温度を28~30℃を目安にする。

病害虫防

除

- ○い も ち 病:取置き苗除去の徹底。 ○カメムシ対策
- ①越冬世代幼虫密度低減のため、6月上旬ま
- でに畦畔草刈りをする。 ②水田雑草のノビエ・シズイ・ホタルイ類の 防除を徹底する。
- ③水稲の出穂2週間前までに畦畔雑草及び牧 草の刈り取りを行う。

2.薬剤防除

○種子伝染性病害防除

薬剤名: タフブロックSP (種子消毒済) 浸種は水温12~15℃、期間は7~10日、 催芽は30℃で24時間を目安に実施。 育苗期間中は10℃以下にならないよう管理。

- ○葉いもち+初期害虫防除 薬剤名:Dr. オリゼリディア箱粒剤 移植3日前~移植当日(散布後十分に散水)、 側条施用可
- ○穂いもち防除
 - 薬剤名:コラトップ(予防剤) 出穂30~5日前、湛水散布 例年いもち病が発生しやすい圃場は必ず散布 しましょう
- ○カメムシ防除……キラップ (1回防除) 発生源である本田内の雑草をなくし、出穂10 日前の水田畦畔及び周辺の草刈りとあわせて の薬剤防除が効果的です。

穂揃い期~穂揃い1週間後まで 出穂10日前~出穂期

1.適期刈り取りの励行

○バインダー刈り

適期は80~90%が黄化、または穂軸の 1/3が黄化。

収穫・乾燥

○コンバイン刈り

籾の85%以上が黄化。

- ★高水分状態 (降雨直後、降水中) での収穫は 極力避ける。
- ★刈り取り晩限はバインダー、コンバインと もに、 出穂後積算平均気温で1,050℃を 目安にする。

2.乾 燥

○自然乾燥

収穫後直ちに棒掛けまたは、はせ掛けし品 質保持のため、2週間から20日間を目安 に乾燥する。乾燥不十分の時は機械乾燥で 仕上げる。

○機械乾燥

収穫後は、直ちに乾燥施設に搬入する。二段 乾燥を行い、乾燥中の籾水分の均一化、過 乾燥の防止、胴割れ粒の混入防止に努める。

3.調 製

篩目は1.9mmを使用。整粒歩合80%以上を



農薬の使用方法を守り、散布履歴の記帳を徹底

農薬の使用前には、使ってよい作物や使用量、濃度、使用 時期、総使用回数などを農薬ラベルで確認し、これらを守る ことが基本です。

散布後には、使用した農薬名や散布した量などを記帳して おきます。記帳することで成分ごとの使用回数や安全日数の 確認が容易になり、また、使用基準を守っているかの証明に もなります。







江刺金札米

令和7年産(品種切替用)

E	標	1等米比率100%、整粒歩合80%以上、タンパク質含有率6.0%以下									
種子及	生育目標指標(目標収量540k				Okg/	10a)	Da)				
1.種 子 全量種子更新 2.品 種 銀河のしずく		栽植 密度 (株/坪)	345	最高分げつ mi茎数 (本) 470~ 515 k株あたり	390~ 430	1穂籾数	登熟歩合	士づくりと基肥が 同時施用できる省力的な 土づくり	稲わら + 金札有機入り 金札有機入り		量 80~100kg/10a 量 100~120kg/10a
		70	16	24	20	62~ 70	90%	稲わら鋤き込みと あわせた基本的な 土づくり(秋施用を推奨)		(春施用)・秋一番(秋施用) オー(秋施用)	施用量 50kg/10a 施用量 45kg/10a
		60	19	28	24			堆肥施用とあわせた 土づくり	堆 肥 + 金札エネルキ	<u>:</u>	施用量 40kg/10a
作業内容等	4 月 上旬 中旬 下旬	上旬	5 月	TA		6 月		7 月 上旬 中旬 下旬	8月 上旬 中旬 下旬	9 月	10 月
生育ステージ	上旬 中旬 下旬 播種・育		田植	下 旬 ^{直え}	上 旬 有効分		下 旬 無効分げ	上旬 中旬 下旬 つ期 幼穂形成期 減数分裂期		成熟期	上旬一中旬一下旬
水管理	畦畔の整備・補修(環境保全)		水深6~10 低温から稲を		cm前後 (生	育促進)	中干し満切り	間断灌水 (徐々に深水) (低温から幼穂を守る)	高温の場合は、地温を下げる水管理をしましょう (夜間かんがいや水の入替え頻度を増やす等) 開花期(浅水)	- 荒灌水(徐々に落水期間を長く)	
地域一斉草刈り	カメムシふ化盛期	前後(5	月中下旬])	イネ科雑草が出穂する前に			めに実施 水稲の出穂10~15日前	本田にカメムシを追い込む可能性があるため控える		
作業	播種基肥散布・耕起	代かき	田植	直え		中干	し・溝切り	追肥	1	落水 収穫	秋 耕 土づくり資材散布
内容	・作土深は15cm確保	。高温障害回避のため 保した 早期移植は控える 植え後3		保したら 植え後30	数の8割を確 5 (目安は田 10日) 期間		カメムシ防除は畦畔や周辺の除草を徹底し、穂揃いから1週関係まるに実施	・積算気温950~ 1,050℃を目安に 籾の黄化割ので判	・稲わらの分解促進 のためできるだけ 早い時期に耕起		
			[箱施	用剤]		は14日間	性及夫加		: 間後までに実施	断し、適期収穫	
農薬防除体系	[種子消毒] 浸種の最終日 24時間浸漬		[初期除田植え 田植え 「初中期一 初期剤 10~2	注草剤] 注直後 発除草剤] 引散布		[中期]	余草剤]	[いもち病予防剤] 葉いもちが発生しなかった 場合は無防除可能	[カメムシ防除剤] ※ 1 回防除		

1.施 肥

施用量 肥料名 (窒素成分量) kg/10a 新・金札ひとめぼれ 30 (3.0) 金札有機入り 40~60 基しひとめぼれ (4.0~6.0%) |金札有機入り 80~100 $(4.8 \sim 6.0\%)$ 春専用レギュラー |肥 |有機フレーバー 40~60 $(2.8 \sim 4.2 \%)$ ペースト734 コープペースト 25 (3.0) 222P 栄養診断による追肥 |金札追肥 9~10 (0.9~1.0) |金札有機入り 50~70 (5.0~7.0%) ひとめぼれ一発 金札有機入り 100~120 型春専用一発 $(6.0 \sim 7.2\%)$

肥培管理

- ※窒素成分のうち50%の有機態窒素を含む。
- ●堆厩肥を1.5t / 10a以上投入する 場合、 堆肥1t当たり基肥窒素を 1kg程度減肥すること。
- ●食味の低下を防ぐため、 減数分裂 期後の追肥はしない。

1.耕種的防除

○畦畔整備・補修による農薬等の流出防止。

雑草

○代かき~田植えまでの日数は4日以内とする。

防

除

2.薬剤防除

各剤とも使用上の注意を守り、適期散布しましょう。

	薬	剤	名			散	布	時	期	散布方法
初期剤	エリシジャン	ブヤン ノボ	ン乳剤	•					1葉期 3まで	
剤	ソル2		移植時または移植直後〜ノビエ1葉期 ※推奨:移植後5日まで					湛水散布		
初中期	カウンシルコンプリート 1キロ粒剤									※5~6cm の水深とし 1週間は止
_	カウンシルコンプリート フロアブル									水管理
発剤	カウン ジャン	コンプリ								
	薬	剤	名		散	布	時	期	対象雑草	散布方法
		11"+	+/=>	,					+511 /	さなーレサケナー

薬	剤 名	散 布 時 期	対象雑草	散布方法
10+	バサグラン 粒剤	移植後15~55日	ホタルイ クログワイ オモダカ 等	落水散布 ※散布後最 低3日間は 止水管理
- 剤を選択 (右記3種類 中後期剤	バサグラン 液剤	移植後15~55日		
	トドメMF 1キロ粒剤	移植後14日~ ノビエ5葉期	ノビエ	湛水散布 ※3~5cm
の中から※選択制	トドメMF 乳剤	移植後14日~ ノビエ7葉期		湛水または 落水散布
新か お ら 制	ロイヤント 乳剤	移植後20日~ ノビエ5葉期	イボクサ、 クサネム ノビエ	落水散布

1.耕種的防除

- ○カビ・細菌病
- 出芽温度を28~30℃を目安にする。 ○い も ち 病:取置き苗除去の徹底。

病害虫防

- ○カメムシ対策
- ①越冬世代幼虫密度低減のため、6月上旬ま でに畦畔草刈りをする。
- ②水田雑草のノビエ・シズイ・ホタルイ類の 防除を徹底する。
- ③水稲の出穂2週間前までに畦畔雑草及び牧 草の刈り取りを行う。

2.薬剤防除

○種子伝染性病害防除

薬剤名: タフブロック 浸種の最終日に24時間浸漬処理(200倍希釈) 浸種は水温12~15℃で期間は7~10日、 催芽は30℃で24時間を目安に実施。

育苗期間中は10℃以下にならないよう管理。 ○葉いもち+初期害虫防除

薬剤名: Dr. オリゼリディア箱粒剤 移植3日前~移植当日(散布後十分に散水)、 側条施用可

○穂いもち防除

薬剤名:コラトップ(予防剤) 出穂30~5日前、湛水散布 葉いもちの発生がない場合は省略可能。

○カメムシ防除······・キラップ(1回防除) 発生源である本田内の雑草をなくし、出穂10 日前の水田畦畔及び周辺の草刈りとあわせて の薬剤防除が効果的です。

散布適期 穂揃い期~穂揃い1週間後まで 出穂10日前~出穂期

1.適期刈り取りの励行

○バインダー刈り

適期は80~90%が黄化、または穂軸の 1/3が黄化。

収穫・乾燥

○コンバイン刈り

籾の85%以上が黄化。

- ★高水分状態 (降雨直後、降水中) での収穫は 極力避ける。
- ★刈り取り晩限はバインダー、コンバインと もに、 出穂後積算平均気温で1,050℃を 目安にする。

2.乾 燥

収穫後直ちに棒掛けまたは、はせ掛けし品 質保持のため、2週間から20日間を目安 に乾燥する。乾燥不十分の時は機械乾燥で 仕上げる。

○機械乾燥

収穫後は、直ちに乾燥施設に搬入する。二段 乾燥を行い、乾燥中の籾水分の均一化、過 乾燥の防止、胴割れ粒の混入防止に努める。

3.調 製

篩目は1.9mmを使用。整粒歩合80%以上を

を散布するときは、これまで以



農薬の使用方法を守り、散布履歴の記帳を徹底する

農薬の使用前には、使ってよい作物や使用量、濃度、使用 時期、総使用回数などを農薬ラベルで確認し、これらを守る ことが基本です。

散布後には、使用した農薬名や散布した量などを記帳して おきます。記帳することで成分ごとの使用回数や安全日数の 確認が容易になり、また、使用基準を守っているかの証明に もなります。



